

〈幼児教育〉

主体性を尊重した協同的な遊びの充実 —遊びの振り返りの場の設定とサークルタイムでの対話を通して—

宜野湾市立普天間第二幼稚園 教諭 玉城 めぐみ

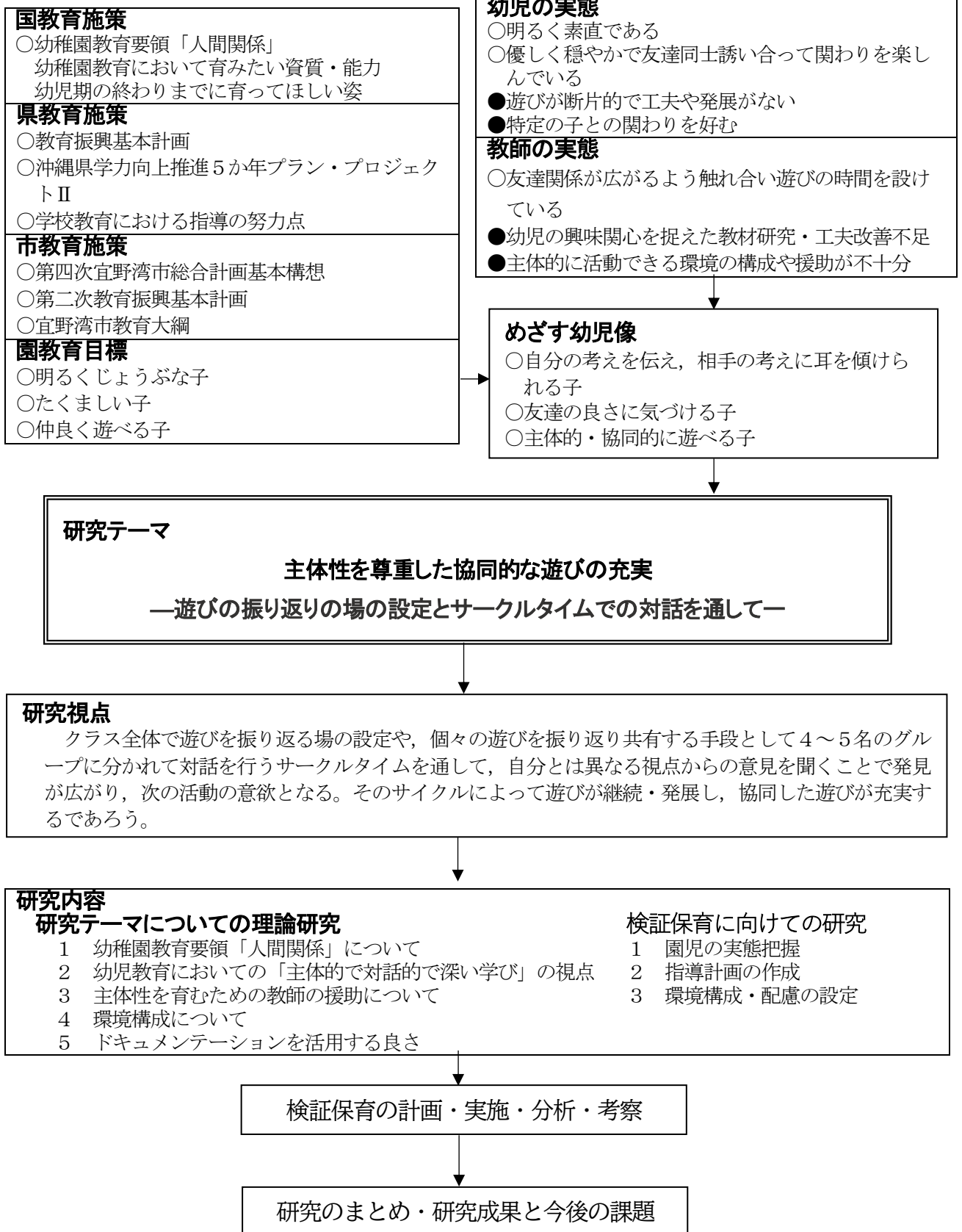
I テーマ設定の理由

近年、新型コロナウイルスの感染拡大により、マスクの着用やソーシャルディスタンスの確保等、新たな生活様式が定着しつつあり、人との直接的な対話の減少による対人関係の育ちの懸念が聞かれるようになってきている。また情報化社会・ネット社会の進展により現代の幼児は多くの情報に囲まれた中で育ち、知識は増えているものの断片的で受け身的なものが多く、学びに対する意欲の低さや関心の低さが指摘されている。このような幼児を取り巻く環境の変化に伴い、文部科学省(2018)「幼稚園教育要領(平成二十九年告示)」(以下幼稚園教育要領)では「主体的・対話的で深い学び」の視点が明記され、“どのように学ぶか”という個々の学びに着目し、生涯にわたって学ぶ力を身につけることが重視されている。そのためこれからの幼児教育では、幼児が学ぶ楽しさを感じ、興味関心を持ったことを自分なりの方法で深く学びながら、疑問を持ち解決していこうとする学びに向かう姿勢を身に付けさせると共に、人と関わり様々な感情体験ができる環境を準備していくことが求められていると考える。

本園の幼児の実態として、友達同士誘い合って関わりを楽しんでいる子が多い反面、遊びが断片的で工夫や発展がなく、なんとなく遊んでいるという姿が見られる。また特定の子との遊びを好み、その子が欠席すると不安になり遊べない子もいる。そのため幼児が色々な子に目を向け、関わりを広げられるよう、クラス活動の中で日常的に触れ合い遊びの時間を設け、ペアやグループになってのリズムやゲーム、集団遊び等を取り入れてきたが、その場限りの関わりで留まり、仲が深まるまでに至っていない。そのため遊びが継続・発展し友達同士で関わり合える遊びの充実を図っていきたいと考える。

幼稚園教育要領解説において「幼児は、幼稚園生活で十分に遊び、その中で楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったことなどを振り返り、教師や他の幼児とその気持ちを共有するなどの体験を重ね、次の活動への期待や意欲をもつようになっていく」とあることから、本研究ではクラス全体で遊びを振り返る場を設定し、その後個々の遊びを振り返り共有する手段として4～5名のグループで輪になって対話を行うサークルタイムを取り入れる。伝え合うことによって遊びを共有でき、友達に思いを共感してもらったり、自分とは異なる視点からの意見を聞くことで発見が広がり“次はこうしてみよう”と次の活動の意欲となる。そのサイクルによって遊びが継続・発展し、協同した遊びが充実するであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究構想図



Ⅲ 研究内容

- 人との関わりを通して学びを深める幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の視点を捉える。
- 幼児が興味関心を持ち、主体的に遊べる教師の援助と環境構成について理解を深める。
- クラス全体で遊びを振り返る場の設定と、個々の遊びを振り返り共有する手段として4～5名のグループに分かれて対話を行うサークルタイムを通して遊びを見取り、幼児理解を深めていく。

1 幼児教育で育てたい人と関わる力

近年、核家族問題やコロナ禍で人との直接的な対話でのやり取りが減り、幼児の対人関係の希薄化が問題となっている。現代の幼児は多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的で受け身的なものが多く、学びに対する意欲や関心の低さが指摘されている。また他者との関わりが苦手、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていないことも課題とされている。文部科学省によって出された「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」には「子どもが成長し自立する上で、実現や成功などのプラス体験はもとより、葛藤や挫折などのマイナス体験も含め、『心の原風景』となる多様な体験を経験することが不可欠」と記されている。しかし現代の幼児は核家族問題などもあり、幼児同士が集団で遊びに熱中できる環境や様々な体験の機会が失われている。そのため幼児教育においては人と関わりながら様々な感情体験ができる環境を準備することが求められていると考える。幼児にとって意味のある多様な体験となるためには教師の意図的・計画的な幼児の発達の見通しを持った保育が求められる。そこで、幼稚園教育要領の人との関わりに関する領域「人間関係」のねらい及び内容を捉えると共に、求められる教師の役割について下記の表1にまとめた。

表1 「人間関係」についての教師の役割 (塚本 2017)参考

<p>人との関わりに関する領域「人間関係」</p> <p>他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。</p> <p><ねらい></p> <p>(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。</p> <p>(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。</p> <p>(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。</p> <p><内容①～⑬と内容に対して求められる教師の役割></p> <p>①先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう</p> <p>幼児の言動を発達の過程であると認識し、受け入れることが大切。一人一人の幼児に思いを寄せ、その子の内面を理解し、自分なりの目当てを持って生活できるように、それぞれの実態に合わせて関わる。</p> <p>②自分で考え、自分で行動する</p> <p>幼児が自分から興味・関心を持って関わり、活動を生み出すことができるように、試行錯誤をしながら思いを巡らせている時間を十分に認め、環境の構成や教材の掲示などの援助をする。</p> <p>③自分でできることは自分でする</p> <p>自分でやり遂げることの満足感を十分に味わえるように、それぞれの幼児の発達に即した受容や励ましなど、適切な援助をする必要がある。身の回りの始末についても、大人の手がかかからなくなることばかりを求めていると逆に、幼児の自立を妨げるようになる。できないときには行動に言葉を添えて、少しだけ援助をしながら、自分でできた満足感を味わえるようにする。</p>

④いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ

幼児がやり遂げたいという気持ちを大切に、自分なりの満足感や達成感を感じることができるように側面から援助することや、共に喜ぶ姿勢が大切である。

⑤友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う

幼児が安心して自分のやりたいことを取り組むことにより、友達と過ごす楽しさを味わったり、自分の存在感を感じ、友達と感情の交流ができるような手助けをすることが大切である。

⑥自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く

それぞれの幼児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの気持ちが伝わるように言葉で仲介役をしたり、納得して気持ちの立て直しができるような言葉かけやスキンシップなどの援助をする。

⑦友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう

一緒に生活する中で、幼児の気持ちや行動の意味など内面の様子をつぶやいたり、友達と心を動かす出来事を共有したりして、互いの感じ方や行動の仕方に関心を寄せ、幼児それぞれの違いや多様性に気づいていく機会をつくっていく。一人一人の良さや可能性を見出す教師の姿勢は、幼児自身が友達の良さに気づいていく姿につながる。

⑧友達と楽しく行動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする

遊びの目的を確認したり、一緒に考えたり、方向性を示したりすることが必要になる。その過程で、一人一人の幼児が自己発揮し、友達と多様な関わりが持てるように援助をしていくことや、幼児が試行錯誤しながら、考えたり、友達と話し合ったり協力する姿を認め、みんなでやり遂げた喜びを味わえるようにする。

⑨よいことや悪いことがあることに気づき、考えながら行動する

相手の気持ちに気づいていけるように、一人一人の幼児に応じて繰り返し働きかけていく必要がある。“どうしていけないのか・どうしたらよいのか”等、幼児なりに考えることができるようにすることが重要である。そして良いことをした時や、考えて行動したときには、しっかりと褒めることである。

⑩友達との関わりを深め、思いやりをもつ

幼児が友達との関わりを深められるように援助すると共に、一人一人の幼児を大切に思いやりのある行動を示し、幼児にとってモデルとなる行動をすることを忘れてはならない。教師の思いやりが幼児の行動に影響する。

⑪友達と楽しく生活する中で、きまりの大切さに気づき、守ろうとする

日常生活や遊びの中での幼児同士のぶつかり合いを活かし、その中で決まりの大切さを伝え、なぜ守らなければならないのか、理由や必要性を理解した上で守ろうとする気持ちを持てるようにする。

⑫共同の遊具や用具を大切に、皆で使う

その時々状況や幼児の気持ちを尊重して、援助の工夫をする必要がある。幼児が自分達の生活を豊かにしていくために、自分の要求と友達との要求に折り合いをつけたり、自分の要求を修正したりする必要があることを体験し、それを理解させていくことが大切である。

⑬高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ

地域や高齢者との方々など様々な人との関わりは幼児の発達に大変重要であることを認識し、同時に、地域の人々にとっても、幼児と関わることで夢と希望が育まれるような互恵性のある交流にしていくことが重要である。

2 幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の視点

これからの幼児教育は“どのように学ぶか”という個々の学びに着目し、生涯にわたって学ぶ力を身につけることを重視している。そのため、幼児が学ぶ楽しさを感じ、興味関心を持ったことを自分なりの方法で深く学びながら、疑問を持ち解決していこうとする、学びに向かう姿勢を身に付けさせることを目標としている。幼児期は個々の幼児の発達の過程によって柔軟に対応していくためには以下の三つ学びの視点を重視するよう、中央教育審議会答申で明記されている。

(1) 「主体的な学び」の視点

周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

(2) 「対話的な学び」の視点

他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりし自らの考えを広げる「対話的な学び」が実現できているか。

(3) 「深い学び」の視点

直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味のあるものとして捉える「深い学び」ができているか。

幼児期での遊びを通した学びが小学校以降の学びに対する姿勢の基礎となることを意識し、保育計画を立てていく。下記の(図1)に示す資料はアクティブ・ラーニングの三つの視点を踏まえた幼児教育における学びの過程(5歳児後半の時期)のイメージ(教育課程部会幼児教育部会 2016)である。

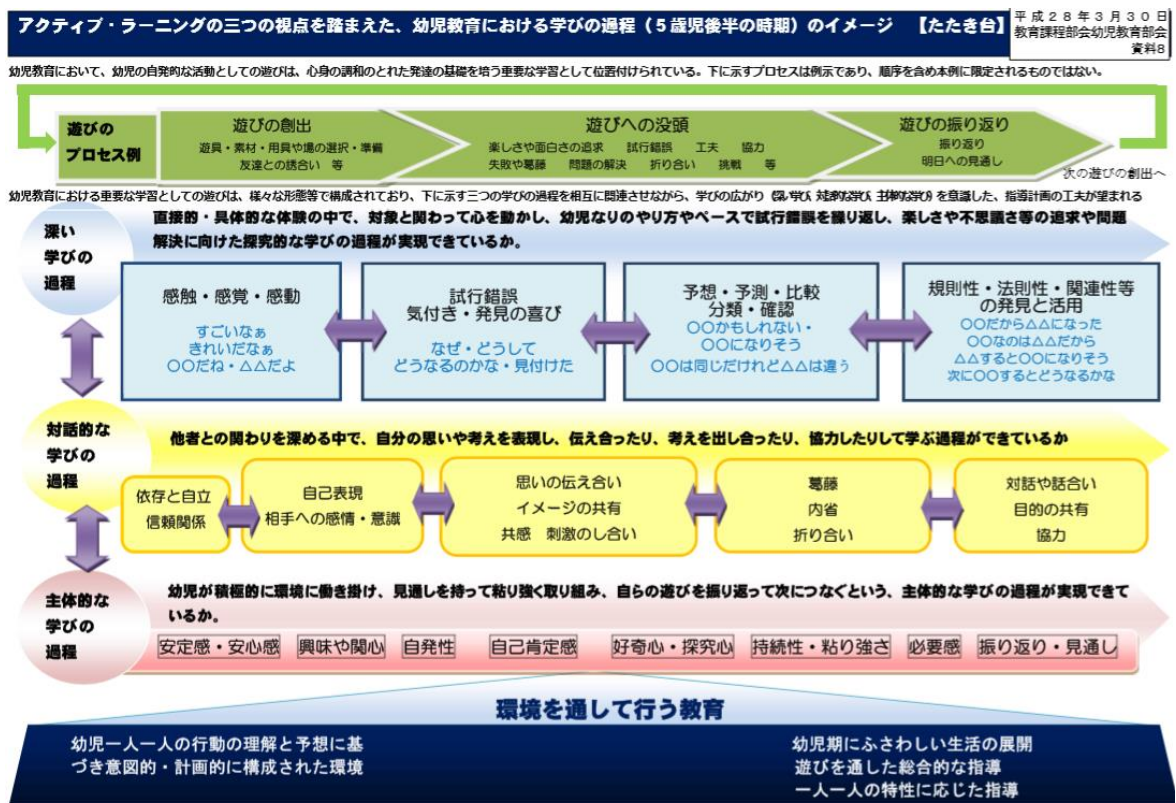


図1 アクティブ・ラーニングの三つの視点を踏まえた幼児教育における学びの過程(5歳児後半の時期)のイメージ(教育課程部会幼児教育部会 2016)

3 主体性を育むための教師の援助

(1) 幼児が自己決定できる経験を多くつくる

主体性を育てていくために、園での決まり事など生活の中で、教師が決めた事を守るのではなく、ルールを自分達で決める等、幼児同士でどうしたら良いのか考える場を設定し、自分で決めて取り組んだという経験を重ねていくことが大切だと考える。また教師が先回りして幼児の選択を奪うようなことがないよう幼児一人一人を信じて関わっていきたい。汐見(2019)は「『子ども主体の保育』というのは、それぞれが好きなことを好きなだけやればよいという意味ではなく、自分でやりたいことを見つけて、方法を考えて達成していくこと」と述べていることから「先

生に言われたからやる” “仕方がないからやる”ではなく、幼児一人一人が必要性を感じ、自らの意思で “何をして遊ぼうか” “どんな道具や材料を使おうか” “どのように表現しようか” という活動の選択や発想を判断できる、自己決定を重ねることで主体性が育まれると考える。また集団での生活で起こる不都合な場面でも、相談して自分達で考えルールを作っていくことで思考力が育まれると共に、集団の一員としての共同性の意識の育ちへとつながると考える。

(2) 幼児と教師が共に主体となった共主体の保育を目指すことで協同性へつながる

幼児が主体的に活動できるための教師の関わりとして近年 “見守る保育” ということが謳われるようになってきている。しかし、この “見守る” 行為はただ、幼児の思い通りにさせるということではなく、目の前の幼児の言動や表情からその子の本来の思いに気づき、どう関わっていくかを考えることだと捉える。

鯨岡(2013)は「主体とは何より『自分の思いを持って自分らしく周囲の人と共に生きる存在』のことだと考えなければなりません」と述べており、主体性を育てていくためには、幼児が主体的にやりたいことを見つけ、自ら関わろうとする姿を教師が認め、その子らしさを肯定していく。その教師の働きかけによって幼児は必要とされている自分を感じ、次第に自分に自信を持って行動できるようになる。教師は幼児の姿を受け止め、その子らしさを大切にしつつも、発達を見据えた幼児に学んで欲しいことに導いていくことが必要である。共に驚き、感動し、楽しむことのできる、教師も共に主体となった保育を目指していきたい。また幼児が “自分はできる” という自己肯定感を持つことで自分だけでなく相手を尊重することができる。そして他者とつながる喜びを感じ、関わりを楽しむようになることから協同的な遊びが生まれていくと考える。その過程を下記の(図2)に表した。

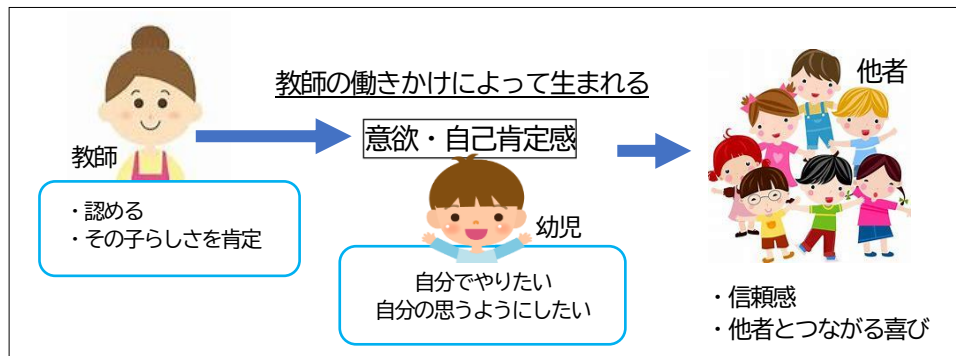


図2 教師の援助によって主体性が育まれる過程 (筆者作成)

(3) 遊びの振り返りの場を設ける

遊びが “今日は楽しかった” という満足感や充実感だけで終わるのではなく “明日も続きがしたい” “次はこうしてみよう” と継続・発展していくためには、今日の遊びが明日へとつながることが大切である。そこで、本研究では遊びを振り返り、個からクラス全体へ共有していく場を日々設定していこうと考える。教師は幼児一人一人の遊びの見取りに努め、その遊びから取り上げたいこと等をクラス全体で紹介し、共有することで遊びが広がり発展することを期待する。また教師も共に遊ぶ中で生じた疑問や困り感などをクラス全体の場で話題にし、考えたり、相談する場面を作ることで協同した遊びへとつなげていきたい。またクラス全体で遊びを振り返った後、4～5名のグループに分かれて遊びを振り返るサークルタイムを設けていく。

サークルタイムとはグループやクラス集団で輪になって対話を行う活動であり、幼児教育についてのサークルタイムの必要性について大豆生田(2022)は「子どもの主体的な活動として遊びを発展させていこうとする保育においては、今日の遊びを明日の保育につなげる共有と対話の時間としての話し合いがより重視化される」と述べている。また無藤(2018)は「振り返りの質を高めるには、友達など他者の考えや見方、関わり方に触れて、自分との異同や、自分なりの対処を考えることが良い契機になる」と述べている。幼児同士で対話をし、振り返りながら共有することで自分なりの考えを見つけたり、相手の考えに触れ、互いに意見を伝え合う中で多様性に気づき、受け入れ合える関係性をサークルタイムで育んでいきたい。

4 環境構成について

幼児が興味関心を持って、自ら関わりたくなる環境を構成していく上で、幼児一人一人の興味関心を引くための充実した遊びの環境を整える必要がある。多重知能理論(ガードナー 1983)では人間の能力には多様性があり、それぞれの人の強みがあると説明している。(図3)幼児期にもままごとが好きな子、虫が好きな子、歌やリズムが好きなど、幼児の興味・関心は一人一人違う。そのため個々の多様な興味・関心を引き出し、それぞれの子の強みや良さや伸ばす遊びを幼児自身が選択できる保育環境をつくらなければならないと考える。これからの時代は多様な個性が生かされる時代であり、すべての幼児の可能性を伸ばしていくよう個々の好きな遊びを尊重し、好きなことを伸ばしていくよう幼児自身の育ちやペースを大切にできる環境を構成していきたい。

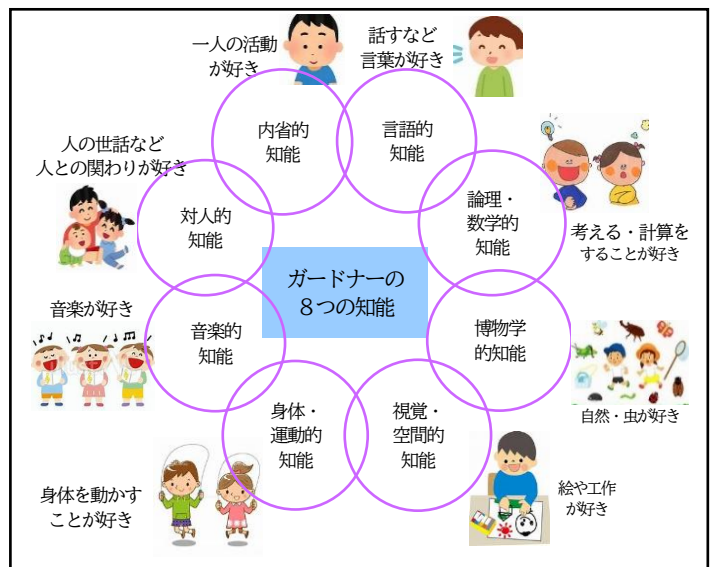


図3 ガードナーの8つの知能 (高山 2020) 参考

5 ドキュメンテーションを活用する良さ

ドキュメンテーションとは幼児の遊びや生活を写真や動画、音声、文字などで視覚的に記録するというものである。ドキュメンテーションは、教師・幼児・保護者の三者がそれぞれの立場で共に効果的な遊びや活動の振り返りができる良さを下記にまとめた。

(1) 教師にとってのドキュメンテーション

ドキュメンテーションによって保育の過程を可視化することができ、保育中は気付かなかった幼児の内面を読み取ることにより保育の質を高めることができる。

(2) 幼児にとってのドキュメンテーション

遊びを可視化することで、遊びを通した自己の学び(経験)を確認することができる。

(3) 保護者にとってのドキュメンテーション

園での幼児の様子を知ることができ、園生活と家庭生活を結びきっかけになる。

以上のことからドキュメンテーションを活用して遊びや活動の振り返りを行っていきたい。

IV 検証保育

検証保育指導案

令和4年12月20日(火)

宜野湾市立 普天間第二幼稚園 年長児 ゆり組

男児16名 女児18名 計34名

保育者 玉城 めぐみ

指導助言者 宮城 利佳子

- 1 主な活動名 「好きな遊びを思い切り楽しもう」
- 2 ねらい ○自分のやりたい遊びを十分に楽しむ中で友達との関わりを深め、意欲的に活動する楽しさを味わう
- 3 内容
 - ・ 興味のある遊びを十分に楽しむ。
 - ・ 友達と一緒にイメージを共有し、工夫したり、試したりする。
 - ・ 自分の思いや話をしたいことを伝え、友達の話に耳を傾ける(サークルタイム)
- 4 活動設定の理由

幼稚園教育要領解説に「幼児は、幼稚園生活で十分に遊び、その中で楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったことなどを振り返り、教師や他の幼児とその気持ちを共有するなどの体験を重ね、次の活動への期待や意欲をもつ」とあることから教師は幼児が主体的に遊ぶ、幼児が“やってみよう”と興味や関心が持てる環境作りや教材研究を行うと共に、幼児の動線を考えた遊びやすい場を幼児と共に考えながら作っていくことで、より主体的な活動となると考える。そこでクラス全体で遊びを振り返る場の設定や、個々の遊びを振り返り共有する手段として4～5名のグループに分かれて対話を行うサークルタイムを通して、自分とは異なる視点からの意見を聞くことで発見が広がり、次なる活動の意欲となる。そのサイクルによって遊びが継続・発展し、協同した遊びが充実するだろうと考え、本活動を設定した。

(1) 教材観

幼児教育においては園環境すべてが教材であると捉え、時期や幼児の興味に寄り沿い、発達に応じた体験や遊びが展開できるように、遊具や教材、材料等を準備したり、時間の保障や、場や空間を作り、環境を構成していこうと考える。試行錯誤しながら夢中になり、そして遊びの深まりが増すことで、更に心動く体験が積み重ねられ主体的な活動意欲となると考える。最近ではチャレンジカードの取り組みが盛り上がり、様々な運動遊びに挑戦したり、出来るようになったことが嬉しく、何度も繰り返し楽しんだり、友達同士刺激し合って楽しんで取り組んでいる姿が見られる。また、泥団子作りでは“サラサラの土”“粘土の土など”土の種類を使い分けたり、水加減や硬さなどを友達同士で伝え合いながら楽しむ姿も見られる。そこで遊びの様子を写真で記録し、ドキュメンテーションとして掲示することで遊びを振り返りやすくなると共に、視覚化することで遊びをイメージしやすくなり遊びが更に発展することを期待する。

(2) 幼児観

好きな遊びを通して友達関係も深まりが見られ、“この子はこんな子”という幼児同士の互いの理解が見られるようになってきた。しかし、仲良しグループの中でも“仲間に入れる・入れない”などの声や動きが見られるようになり、友達関係が日々変容する姿も見られる。そのような場面を幼児同士の気持ちを確認し合うチャンスと捉え、逃さず関わり、互いの思いを伝え合っていけるよう橋渡しをしていきたい。

(3) 指導観

教師は幼児の遊びを見守りつつも、遊びへ積極的に加わりながら、教師と幼児が共に主体となる共主体の保育を心掛けていきたい。教師が幼児の遊びの中での学びを言葉にして表現することで、幼児は自分の学びを再確認すると共に、幼児がより意欲的に探究心を持って取り組めるようにしていきたい。その後の遊びを振り返る場のサークルタイムで話題にすることで、その時の自分の思いを振り返り伝え合える場となるよう、幼児同士のつながりを深めていきたい。またドキュメンテーションを掲示し、遊びが視覚化されることで振り返りやすく自分の遊びの軌跡を確認することで次なる意欲としたい。

5 活動計画

	日程	ねらい	主な活動内容	◎教師の援助 ★環境構成
1	6月 7月	○好きな場所や遊びを見つけ、友達と楽しむ。 ○自分なりにイメージを実現したり、工夫したり、試して遊ぶ。	虫捕りや観察・木登り・石鹸遊び・色水遊び・水遊び・泥遊び・砂遊び・ソフトブロック・折り紙・粘土・マルチパネ・ままごと・製作等	◎自分のしたいことの実現に向けて考えたり、試している姿を認め見守ったり、心の動きに応じていく。 ★活動の様子を見て、必要な遊具や素材を準備したり、数を増やす等、自分で考えたり試したりして遊べるようにする。
2	9月 10月	○興味を持った遊びを友達と一緒に楽しむ。 ○友達と思いやイメージを出し合い、遊びを進める楽しさを味わう。	虫捕りや飼育・石鹸遊び・色水遊び・水遊び・泥遊び・砂遊び・ソフトブロック・折り紙・粘土・マルチパネ・ままごと・大縄跳び・製作等	◎力を発揮している事や、主体的に遊び発見をした喜びを共有したり周りにも知らせ、友達の動きや考えにも関心を持たせる。 ★目的を持てたり、友達と思いやイメージを出し合っているよう、活動内容の工夫を図ったり、場や時間の確保を行う。
3	11月	○目的や目標に向かって、自分の力を十分に出しきる心地良さを味わう。 ○友達と協力したり、イメージを合わせて遊ぶ。	虫捕りや飼育・砂遊び・運動遊び（縄跳び・フラフープ・ホッピング）ソフトブロック・折り紙・粘土・マルチパネ・ままごと・大縄跳び・製作等	◎遊びの中でやりたい事や方法、場所等の考えを互いに言葉や動きで確認し、友達とイメージを合わせて遊びが進められるように援助する。 ★自分のやりたい遊びをじっくり取り組めるよう、遊びの空間や場を幼児と整理したり、更に発想が広がるよう教材を工夫したりする。
4	12/7 (水)	○自分のやりたい遊びに取り組む中で、友達との会話ややり取りを楽しみながら遊びを進める。 ○自分の思いを伝え、友達の考えにも耳を傾けて聞こうとする。 (サークルタイム)	チャレンジ遊び（縄跳び・フラフープ・竹馬・鉄棒・ホッピング・鉄棒）サッカー・泥団子作り・砂遊び・ごっこ遊び・うさぎとの触れ合い・ヤゴ捕り・鬼ごっこ・木登り・三輪車・剣作り・ソフトブロック・マルチパネ・エイトブロック・自然物を使ってクリスマス製作等	◎自分のやりたい遊びを見つけ、夢中になっている姿を見守り、遊びの中での気づきや発見を共感し、更なる意欲となるようにする ◎ルールなどを自分達で相談しながら作っていく姿を見守り、積極的に教師も遊びに加わり遊びがより協同的になるよう盛り上げていく。 ◎遊びの振り返りの場（サークルタイム）では、自分の話をするだけでなく、友達の話や考えにも触れて、友達間をつないでいく。 ★自分なりの目標を持って、挑戦できる時間や場の確保や動線考えた環境を幼児と共に作っていく。
5	12/8 (木)			
6	12/9 (金)			
7	12/12 (月)	○自分のやりたい遊びに取り組む中で、友達とイメージを出し合って遊ぶ楽しさを味わう。	チャレンジ遊び（縄跳び・フラフープ・竹馬・鉄棒・ホッピング・鉄棒）サッカー・泥団子作り・砂遊び・ごっこ遊び・さらさら砂集め・うさぎとの触れ合い・木登り・三輪車・自然物を使ってクリスマス製作・剣作り・ソフトブロック・マルチパネ・エイトブロック等	◎自分のやりたい遊びを見つけ、夢中になっている姿を見守り、遊びの中での気づきや発見を共感し、更なる意欲となるようにする。 ◎友達の頑張りを応援したり、励ましたりしている場面を逃がさず捉え、周りに伝えていけるようにする。 ◎遊びの振り返りの場（サークルタイム）では、自分の話をするだけでなく、友達の話や考えにも触れて、友達間をつないでいく。 ★興味や関心があることに、夢中で取り組めるように、幼児の動きを見て、物的・空間的環境を構成していく。
8	12/15 (木)			
9	12/16 (金)			
10	12/20 (火)	○自分のやりたいことを十分に楽しむ中で、友達との関わりを深め、意欲的に活動する楽しさを味わう。 ○自分の思いを伝え、友達の考えにも耳を傾けて聞こうとする。 (サークルタイム)	チャレンジ遊び（縄跳び・フラフープ・竹馬・鉄棒・ホッピング・鉄棒）サッカー・泥団子作り・砂遊び・ごっこ遊び・さらさら砂集め・うさぎとの触れ合い・木登り・三輪車・自然物を使ってクリスマス製作等	◎工夫したり試行錯誤する姿を見守り、幼児の遊びの中での学びを教師が言葉にして表すことで幼児が更なる意欲となるようにしたい。 ◎遊びの振り返りの場（サークルタイム）では、気持ちや考えを自分なりに表したり、友達の考えや表現にも触れて、友達間をつないでいく。 ★興味や関心があることに、夢中で取り組めるように、幼児の動きを見て、物的・空間的環境を構成していく。

6 公開保育指導案

指導案 令和4年12月20日(火)		年長児ゆり組 男児16名 女児18名 計34名 保育者：玉城めぐみ	
＜主な活動名＞		好きな遊びを思い切り楽しもう	
先通までの 幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジカードの取り組みに意欲的で、できるようになるまで一生懸命取り組む姿が見られる。 ・サッカーでは自分たちなりにルールを作ったり確認したりしている。時にはルールの違いから言い合いになる場面も見られる。 ・泥団子作りでは、土の感触を楽しみながら、何度も繰り返し作ったり、友達同士教え合ったりする姿が見られた。 ・自分たちで考えた遊びを6～7名の集団で楽しんでいた。 ・サークルタイムでは、友達の話に質問をする子、司会進行をする子など、少しずつ進歩が見られた。 		
ねらい	○自分のやりたい遊びを十分に楽しむ中で、友達との関わりを深め、意欲的に活動する楽しさを味わう。	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・好きな遊びを十分に楽しむ。 ・友達と一緒にイメージを共有し、工夫したり、試したりする。 ・自分の思いを伝え、友達の考えにも耳を傾けて聞こうとする。(サークルタイム)
時間	○予想される幼児の姿	◎教師の援助	☆環境構成 評価項目 (幼児の姿)
8:15	○登園する ・朝の挨拶を交わす ・所持品の始末をする ・名札を付ける	☆戸や窓を開けて新鮮な空気を入れ換え、安全確認を行う。 ◎名前を呼んで笑顔で挨拶を交わし迎え、会話しながら気分や健康状態を把握する。(視診・触診)	◇表情明るく、喜んで登園しているか。
8:20	○朝の活動を行う ・落ち葉拾い ・草花への水やり ○自分のやりたい遊びを楽しむ 《戸外》 チャレンジ遊び(縄跳び・フラフープ・竹馬・鉄棒・ホッピング) サッカー・泥団子作り・砂遊び・木登り・ままごと・うさぎとの触れ合い等 《室内》(雨天時) ソフトブロック・マルチパネ・エイトブロック・クリスマスバッグ製作・折り紙・粘土・描画等	◎身の回りのことができているか確認したり、知らせる。 ☆生活の流れを絵や文字で表示する。(視覚的情報) ☆落ち葉拾いのカゴやじょうろを取り出しやすい場所に用意する。 ◎植物の生長や変化に気付いたり、優しさや責任感が育まれるようにする。 ☆興味や関心があることに、夢中で取り組めるように、幼児の動きを見て、物的・空間的環境を構成していく。 ◎必要なものを一緒に準備したり、幼児が主体的に環境に関わり楽しめるようにする。 ◎遊びや活動への興味や幅が広がったり、友達との関わりが深まっていくように援助する。	◇やりたいことを意欲的に楽しんでいるか。
10:00	○片付けをする ・遊びに使った物を元の場所に戻す ・手洗い、消毒・マスクの着用	◎安全面に常に注意しながら遊びを見守ったり、積極的に遊びに加わる。その際、教師主導にならないよう言動に気を付ける。 ☆片付けしやすいように工夫する。(絵表示する・動線を考えて、遊具棚やカゴを配置する)	◇友達との関わりを楽しみながら遊びを進めているか。
10:20	○手話ソングを楽しむ ・「赤鼻のトナカイ」 ・「ありがとうの花」 ・みんなで挨拶 ・日付や天気、出席状況の確認をする	◎思いを伝え合っている時は見守り、うまく伝えられない時は少し言葉を添えたり、伝える方法を知らせたりして、互いの思いをつないでいくようにする。 ◎片付け忘れていたり、後回しにしている幼児には声をかけたり、教師も一緒にやってみせて気付かせていく。 ☆グループごとに座れるよう、床に色別に印を付けておく。 ◎学級みんなで歌ったり触れ合ったり、和やかな雰囲気を作り、学級や仲間意識を高めていく。 ☆伝えたい思いを十分にさせるように、場の持ち方を工夫する。(全体の後はグループでの伝え合い・言葉を補足する等)	◇友達とイメージを共有し、工夫したり、試したりしているか。
10:40	○今日の感想(振り返り) ・楽しかったことや気付いたことやみんなに知らせたいことを伝え合う。(学級) ○サークルタイムで遊びを共有する(グループ)	◎友達の言葉に耳を傾けたり、自分の伝えたいことを自分なりの言葉で表現することを認めていく。 ◎気持ちや考えを自分なりに表したり、友達の考えや表現にも触れて、友達間をつないでいく。 ◎今日の出来事や楽しかったことを振り返り、明日以降の遊びや活動への期待へとつなげていく。	◇感じたことや思いを、友達と伝え合うことを喜び、場を楽しんでいるか。
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が主体的に活動し、夢中で遊びや活動に取り組める場や空間、時間の確保はできていたか。 ・友達と関わり合って遊びが進められるような環境の構成や教師の言葉かけがあったか。 ・幼児と共に、教師自身も楽しんで遊びや活動に取り組んでいたか。 		

7 検証保育後の指導助言（琉球大学教育学部 講師 宮城利佳子氏）

○クラスの集まりの場で伝えたいことをみんなの前で発表し、そこからもっと話をしたい子はその後グループで話すという流れは、幼児の話す意欲へとつながっていると感じた。

●「教師がなぜ、サークルタイムを取り入れたいのか」サークルタイムのねらいを意識し、援助方法を考えていく必要がある。幼児はただ、「話をする」といっても「なんで話をするだろう」と戸惑う。幼児は生活の中で必要性を感じて対話をする。幼稚園生活の中で、対話をする必要感を感じることが大切であり、伝え合うためには伝えたい相手、伝えたい気持ち、伝えたい充実した遊び、伝えるための豊富な言葉が必要。伝えたいことはあるけれど、伝えられる言葉がないのかな？という場面が見られた。今日の遊びで、ある女兒が「葉っぱ」とだけ言葉を発し、それに対し、教師が共感するだけの返しでは幼児は受け止めてもらえた安心は感じるかもしれないが、それ以上の発展がない。「葉っぱ」という幼児の発言に対し、「なんできれいだと思うの？」等質問を多く投げかけ、膨らませてあげる援助が必要。

◇言葉数を増やすには絵本の読み聞かせ（家庭の協力も必要）でたくさん言葉との出会いも必要。

◇週案会議の工夫として、遊びが充実していくための教師の援助を考えた週案会議にすると良い。

遊び一つにしる、その遊びで幼児が何を学んでいるか、幼児一人一人がどの遊びに夢中になっているかを読み取り、どうやったら遊びが深まるかを考えた週案となると良い。

◇幼児がじっくり遊び込めるよう、幼児同士をつなげる教師のあり方。教師が幼児のどの遊びに加わるかが大事。

◇遊びを戸外限定にするなら、遊びが充実するためには戸外でも製作できる環境を作った方が良い。

V 研究の検証方法

1 幼児理解の方法について

エピソード記述を用いて検証していく。幼児理解を深めるためには、保育の振り返りや日々の記録が重要だと考える。日々の自分自身の保育を振り返り、個々の幼児の心の動きや育ちを理解しようと努めることでより良い保育へとつなげていきたい。そのため、検証保育においても幼児の育ちの筆記記録を基本に、写真やビデオなどで記録を残していく。さらに教師間の情報交換、共通理解など多様な視点で振り返ることが幼児理解を深める上で大切である。幼児理解の方法としてエピソード記述（鯨岡 2013）を用いて、幼児の心の動きを捉え、次なる教師の手立てへとつなげていきたい。また、保育記録を取る際に（図4）

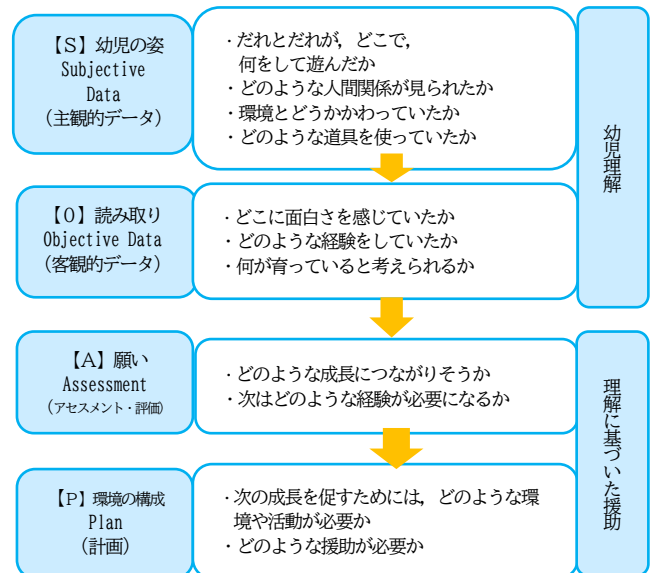


図4 保育記録に取り入れたい視点（河邊 2019）

のSOAPの視点（河邊 2019）で保育の内容を見つめ直し、次に必要な援助へとつなげられるよう意識する。

2 教師の援助の工夫について

幼児が興味関心を持って自ら環境に関わり、遊び込んでいくためには幼児にとって魅力ある環境、そして友達と関わり合うことが必要だと考える。そこで教師は、幼児理解を深め友達と関わり合って協同して遊べるよう園環境を幼児と共に主体となって作っていく必要がある。また、今日一日を幼児と共に振り返り、明日へ期待感を持てるようにする為、クラス全体での振り返りの場を設定し、その後グループに分かれて対話を行うサークルタイムを設けることで検証をしていく。

3 評価の視点について

検証保育の評価では、幼児が主体的に環境に関わり、協同的な遊びが育まれる過程に視点をあてていく。幼児が遊びを通して、どのように環境に関わり、友達と関わり合って遊びを進めているか観察を行いエピソード記述を取る。記録をもとに幼児の育ちや学びの過程を捉え、変容に焦点をあて評価の視点とする。

VI 研究視点の検証

1 保育の振り返りとエピソード記述から幼児の姿を捉える

研究視点

クラス全体で遊びを振り返る場の設定や、個々の遊びを振り返り共有する手段として4～5名のグループに分かれて対話を行うサークルタイムを通して、自分とは異なる視点からの意見を聞くことで発見が広がり、次なる活動の意欲となる。そのサイクルによって遊びが継続・発展し、協同した遊びが充実するだろう。

研究テーマに基づいた保育実践を行い、保育の振り返りや写真、ビデオ記録、エピソード記述を通して、幼児の姿や変容をもとに検証を行う。その対象を「クラス全体」と「抽出児T」「抽出児J」「抽出児K」とし、変容を検証する。日々の遊びの中から、またクラスで遊びを振り返る場の設定や、4～5名のグループに分かれて対話を行うサークルタイムを設け、その中での幼児の気持ちの変化や心の育ちに焦点をあてる。また、研究視点に基づく教師の援助の工夫を通して、検証の効果性や幼児の変容を捉えていく。教師による援助を二重線「_____」、幼児の心の動きを点線「.....」、反省や課題を波線「~~~~~」で示す。

2 検証前の姿

検証前の幼児の様子	教師の願い
<p><クラス全体></p> <p>・年長ゆり組は、進級児11名、保育園より入園22名、初めての集団保育1名の計34名学級である。コロナ禍で育った環境の影響もあってか、室内遊びを好み、外で思い切り遊ぶ子が少ない。また気の合う友達との関わりで留まり、友達関係の広がりが見られない。最近では“仲間にいれる・いれない”というトラブルも見られるようになってきた。</p>	<p>・気の合う友達の枠を超えた友達同士のやりとりを通して、関係性を深めていってほしい。同じ目的を持った活動を通して“嬉しい”“楽しい”等、感動体験の共有をすることで友達の良さに気付き、受け入れ合い、協同した遊びを進める楽しさを感じて欲しい。</p>
<p>抽出児T</p> <p>・4月入園の男児。色々な環境や遊びに興味を示すものの、気が散りやすく飽きっぽい性格もあり一つの遊びが長続きしないことが多い。また一つのことに夢中になると他が見えなくなってしまうことや、相手の立場に立って物事を考えることが苦手で、一方的な思い込みから衝動的に手がでてしまい、他児とトラブルになることが増えている。最近では友達から受け入れてもらえないことを気にして自己肯定感が下がっているように見受けられる。</p>	<p>・友達との関わりを通して、友達関係を深めて欲しい。同じ目的を持った活動を通して“嬉しい”“楽しい”等、感動体験の共有を通して、自己を発揮しながらも自分を受け入れてもらう経験を重ねて自己肯定感を取り戻して欲しい。また、遊びの中で相手の立場になって考えられるような場面等、きっかけを逃さず共に考え、友達の思いに気づけるよう援助していきたい。</p>

<p>抽出児J</p> <p>・4月入園の男児。生き物が好きで虫捕りや生き物の観察を楽しむ。しかし、最近は「先生、遊ぼう」と教師の後をついてきたりと夢中になる遊びが見つからない様子が見られる。人が好きで自ら積極的にコミュニケーションをとろうとするが、友達との関係性が継続せず、その場限りの関係だったりと仲が深まるまでに至らない。</p>	<p>・本児が夢中になって取り組めるような遊びを通して自己発揮しながら協同した遊びを体験させたい。友達との関係が深まるような場を教師が意図的に設定したり、友達関係をつなげていけるタイミングやきっかけを見つけていけるよう関わりたい。</p>
<p>抽出児K</p> <p>・進級児の女児。天真爛漫で明るく誰とでも人見知りせず関わることができる。園の様々な環境に興味を持ち、積極的に関わり、発想も豊かであるが友達関係の面で他児との仲の深まりが見られないことが気になる。</p>	<p>・友達との関わりを通して、“嬉しい” “楽しい” などの感情体験を共有することで関係が深まるよう援助し、本児の良さを他児に気付いてもらえるよう工夫していきたい。</p>

3 検証保育

遊びを共有することができた検証場面①

<p>12月 2日 (金) 「お話タイムでみんなに伝えたい」</p>
<p>対象：クラス全体</p> <p><背景></p> <p>友達同士関わり合える協同的な遊びの充実と「<u>今日も楽しかった、明日も続きがしたい</u>」と思えるような遊びの継続を図るため、遊びが終わった後、クラス全体で<u>遊びを振り返り、今日の楽しかったことや、皆に伝えたいことを発表する時間を設定</u>した。</p> <p><エピソード></p> <p>ある日普段は手を挙げることがないZが手を挙げていた。私はZが初めて手を挙げたことが嬉しく、また普段「面倒くさい」が口癖で苦手なことにはなかなか挑戦しないZがその日は竹馬に挑戦していたことをクラスの皆に伝えたいことや、<u>ちょうど運動遊びに挑戦し始める子が出てきた時期で、友達の取り組みに刺激を受け“自分もやってみよう”と挑戦したくなるような雰囲気を作りたかったこともあってZを指名した。他児もZが発表をするのが初めてということもあってかZの発表に興味を持って聞こうとする姿勢が見られた。Zが発表を終えると「Zが頑張っているところ見たよ」という他児の声が聞かれ、Zはその声を聞いて「いや、まだ3回(3歩)しか歩いてないんだけどな」と言った。すると「俺も一緒にやったんだけど、絶対に諦めたくないって言って頑張ったよな」というその日Zと一緒に竹馬の練習をしていた男児が言った。また竹馬に乗れる子達が「(背中を)上までピンってさせたらできるんだよ」「背中を丸めたらだめだよ」「毎日たくさん練習すればいいんだよ」など様々なアドバイスも飛び交った。Zが席に戻ろうとするとZと仲の良い男児があたかも自分が発表したかのようにZと目を合わせ、「楽しかったよな、またやろうな」と声をかけていた。他児もZの話聞いて興味を持った様子が伺えた為、その後のサークルタイムではきっとZのいるグループは対話が盛り上がるだろうと期待していたが、その後グループに分かれると竹馬の話は話題にでることもなく、ゲームの話や手遊びを始めた。</u></p> <p><考察></p> <p>教師とクラス全体の振り返りだけでなく、幼児が話をする場を設けることで発表をした幼児は聞いてもらった嬉しさを感じることができ、また聞く側も友達の話だからこそ「聞いてみよう」という気持ちが生えていた。Zは友達からも一目置かれる憧れの存在であることから他児は「Zの話聞いてみたい」と興味を持ち、話を聞こうとする姿勢が見られた。このことから、信頼関係が築けている友達や教師、または親しみを持ち関わりたいと思った子の話は聞きたいと思うのだと感じた。反省として、<u>普段遊びの様子をドキュメンテーションで掲示していたが、Zの発表に合わせて写真を準備し、写真を見ながら発表をしたらより遊びがイメージしやすかったのではないかと感じた。教師が幼児一人一人の遊びに目を向け、取り上げたい遊びや更に深まって欲しい遊びをクラス全体の場で伝えることで、遊びに興味を</u></p>

もつ幼児が増え、そのから広がりや発展した遊びへとつながると感じた。しかし、その後グループに分かれると一旦対話がそこで終わってしまい、継続できないことが課題としてみられたため、クラス全体での振り返りの場での座り方を最初から各グループでサークル状にするなどの工夫や改善を図る等、検討していく必要性を感じた。



写真1 クラスで遊びを振り返り発表している場面



写真2・3 ドキュメンテーションの掲示
(幼児向け)



写真4 ドキュメンテーションの掲示
(保護者向け)

遊びの振り返りで思いを伝え合うことができた検証場面②

12月 8日 (木) 「後悔している」

対象：抽出児T

<背景>

感受性が豊かで様々な活動に興味を持って積極的に関わるT。しかし気が散りやすく飽きっぽい性格もあり、最近は一つの遊びが長続きしなく、遊びを転々としている。また、友達関係で仲間に入れてもらえないことも重なり、気性が荒くなり友達関係でトラブルになることが続いていた。

<エピソード>

男児二人がサッカーをしてところへTが来て仲間に入ろうとするが、男児二人は入ってほしくない様子が伺える。Tはその様子にも気付いたのか(自分が入って欲しくないと思われていること)自分のことを気にかけてほしいのか、わざとらしくシュートの邪魔をして気を引こうとしている。すると「もう、やらないで!」と怒って男児二人はその場を離れていった。その様子をTは笑って見送った。そして近くで見ていた私と目が合ったため、私は困っているなら声をかけてねという思いで微笑み返したが、Tは寂しそうな顔をして、その場を離れた。私はあえてTへすぐに声をかけず、遠くからTに気付かれないように遊びの様子を見ていた。Tはその後も様々な遊びをするが、どの遊びも長く続かず遊びを転々としていた。その頃、男児二人が幼稚園裏でサッカーを始めた。その場所が段差もあり、ボールも蹴りにくい場所だったため、私は二人に「なんでこんなところでサッカーをしているの?」と聞くと「向こうでやるとTが邪魔するからいやなんだ、ここならTにも気付かれない」と言った。私は「なるほど、だからここなんだね」と二人の話を聞きつつも「Tも仲間に入れて欲しかったのかな」と一言フォローを加えた。するとまた二人は表に戻った。そして二人はTが別の遊びをしていることを確認すると安心した様子で再びサッカーの続きを始めた。その様子をTは遊びながらも気付いて見ていたが、加わろうとはしなかった。



写真5
Tがサッカーに入りたい様子



写真6 ゴールの邪魔をするT

<その後のグループでのサークルタイムにて>

サッカーをしていた男児二人とTは同じ生活グループである。サッカーでのトラブルもあったため、私はどのような話になるか様子を見たいという思いから、このグループのサークルタイムに加わってみた。案の定、男児一人はサッカーの時の嫌な気持ちを引きずっており、Tの隣には座りたくないと言った。その様子をTは口をギュッと結び、黙って聞いていた。もう一人の男児は口には出さないが、Tを見る顔が険しく感じる。するとTが突然自分の頭を握りこぶしで叩き始めた。周りの子も驚き、私が「どうしたの?」と聞くと「自分は馬鹿だ」と言う。「なんで?」と私が聞くと、「サッカーをしたあの時、Kを蹴ってしまったから自分は馬鹿なんだ」と言う。私はその場面は見えていなかったで、「そうだったの?」と男児に聞くと、その時の状況を説明してくれた。するとTが「〇〇さっきはごめんね」と言

った。男児は「いいよ」とすぐに許した。Tが謝ってくれたことに満足したのか笑顔も見られる。私が「Tも一緒にサッカーをしたかったのかな」というとTは頷いた。そのやりとりを見ていたもう一人の男児が「もしかしてTは後悔しているの？」とTに言った。するとTははっとした顔を一瞬して黙って頷いた。私が「後悔って何？」と聞くと男児が「ごめんねって謝っても（心から）消えないことだよ」と言った。するとTは男児が自分の気持ちを分かってくれた嬉しさからなのか男児にギュッと抱き着いた。男児も「やめるよ」と言いながらも笑みがこぼれ、グループの皆が笑い、和やかな雰囲気になった。

<考察>

遊びの中でいざこざやトラブル。その場では怒り等から相手を受け入れることができなくても少し時間が経ち、互いにクールダウンした後のサークルタイムという時間があつたことで思いの伝え合いができたと考える。また、友達が自分の言葉にできない“後悔している”という気持ちを代弁してくれたことで、Tは自分の気持ちを理解してくれたことに嬉しさを感じたと考える。遊びの中でいざこざやトラブルの場面を、互いの思いを伝え合う良ききっかけと捉え、相手の思いに気づけるような投げかけをしていく必要がある。今回の検証場面ではTの内面に気づき「後悔しているの？」と言葉で表現してくれた友達の存在によって思いを伝え合い、互いを理解し合う学びの場となったと感じる。教師が幼児同士の思いをすべてつなげようとするのではなく、幼児同士が互いの思いに気づき、心がつながっていける保育ができるようにしていきたい。

挑戦してできるようになったことで更なる意欲となった検証場面③

12月 19日(月) 「できるって楽しい」

対象：クラス全体 抽出児]

<背景>

幼児に諦めずに取り組んだことによる達成感や充実感を感じて欲しいという思いから、大縄跳びやフラフープなどの運動遊びを行ってきた。しかし、もっと幼児が意欲的に取り組める手段の一つとしてチャレンジカードの取り組みを始めた。まずは教師があらかじめ設定した幼児に取り組んで欲しい項目を記し、それが達成できたらシールを貼り、すべての項目を達成できたら、チャレンジ名人としてバッジがもらえるという取り組みである。すると、いままではきっかけがなかったからなのか、挑戦しようとしなかった幼児がこのチャレンジカードをきっかけに興味を示し、挑戦しようとする姿が見られた。



写真7・8
自分達で作った技を披露する様子

できるようになったことで自信をつけた女兒2人が、「二人で新しい技を考えたから見て」という。その技とは、二人縄跳びをし、縄を回していない方の子はホッピングをしながら、縄に合わせて飛ぶというものである。技の難易度もそうだが、自分たちで考えた技ということに驚いた。すると、別の女兒は縄跳びを2本使ってできることを喜んで見せてくれた。すると「俺は首でフラフープができるよ(まわせるよ)」「俺は高速フラフープだよ」等と、できるようになった嬉しさから更に自分達で発案して技を極めていく姿が見られた。その後同僚職員と保育カンファレンスをした上で、幼児が自分たちで考え、挑戦したいと思ったことに取り組めるようにと、“チャレンジカードスペシャル”を作った。(今までのチャレンジカードの挑戦して欲しい種目部分を空欄にし、自分達で書き込んでいくというもの)チャレンジカードスペシャルの声掛けに幼児はさらに意欲的になり「自分はこの3項目をやるんだ!」と目標を決めている子もいた。その中で今までのチャレンジカードに、あまり興味を示さず、「できないんだよな」と諦めかけていたIが「三角竹馬をやる!」と目標を立てた。自分決めた目標という事もあつたか諦めずに取り組みできるようになると、そのことをきっかけに自信をつけ、縄跳びや竹馬、フラフ



写真9 喜んでチャレンジカードを見せる様子

ープにも挑戦するようになった。顔つきも真剣な表情に変わり、今まで取り組まなかった以前に配布したチャレンジカードを毎日持って歩き、何度も繰り返して喜び、できるようになった自分を誇らしげに堂々とする姿が見られた。



写真10 自信满满に竹馬にのる様子

<考察>

幼児が自分達なりに工夫をして遊びを発案する過程に至るまでには遊びを楽しみ、継続していくことが必要である。幼児の姿を受け、そこから次なる手立てを考えることで更なる子どものやる気や興味を引き出すことができる。今回は女兒二人が発案した二人縄跳びホッピングという技がきっかけで保育カンファレンスを行い、チャレンジカードスペシャルという幼児が自分で考えた種目に挑戦できる取り組みができたことが良かった。遊びを幼児なりに工夫している場面を遊びが深まるチャンスと捉え、逃さずに次なる手立てを考えることの重要性を感じた。

楽しかった体験や共感してくてる他者の存在で伝えたい意欲につながる検証場面④

12月 21日(水) 「今日は楽しかった！」

対象：抽出児J

<背景>

サークルタイムでなかなか話が進まないグループが多かったため、クラス全体での話で「いいなと思った子がいたから紹介するね。〇〇さんはお話タイム(サークルタイム)で友達の話に『どうやってやったの?』とか『うんうん、それでどうなったの?』とか質問をしたり、『うん、うん。そうなんだね』とか相槌をうったりして、話をしている子ども自分の話を聞いてくれているのだから気持ちになれるし素敵だなと思ったよ。あと◇◇さんは、『誰からお話する?』『じゃあ〇〇君どうぞ』とか友達が話をしやすいように進める司会役をしていてこれもいいなと思ったよ」とサークルタイムで素敵だった幼児の様子を伝えた。

<エピソード>

いつもは話をする体制になかなかならないゴジラグループ。今日は欠席者もあり、3名でのサークルタイムだったが、真っ先に「はい! Jからお話したい!」とJ。普段は話をする気や聞く気が見られず、教師のあとを付いてきたり、寝転がりだすことも多いJ。しかし今日は園の誕生会でお祝いをした誕生児。普段から忘れ物が多いJが今日は誕生会で舞台上がりインタビューを受けるということで、上履きを忘れず持ってきたことを担任に褒められたことや、母親が誕生会に参加してくれて嬉しかったという思いから話したいという意欲がでたのだと考える。「はい、J君どうぞ」と進行役の男児。私がクラス全体で進行が素敵だったことを話したこともあってか、自信满满にちらっと私の顔を確認しながら進化した。Jは「今日ね、Jね、誕生会が楽しかったです」と満面の笑み。そのあとも同様に他児も自分が遊んで楽しかった話をした。するとまたJが「はい!」と手を挙げ2回目の発表。そして、「誕生会で食べたケーキが美味しかったです」とまた満面の笑みで話をした。



写真11 サークルタイムの様子

<考察>

話を振ったり、場の進行をしてくれる幼児の存在でJは自分の話を聞いてもらえた満足感を感じることができたと考え。またJは誕生会で自分が主役となって皆からお祝いされた嬉しさから、伝えたい意欲へとつながったと考える。嬉しいことがあったという体験からその思いを伝えたくなり、そしてその思いに耳を傾け、聞いてくれる友達の存在によって伝える言葉の育ちとなつて感じた。今回はJにとって誕生会という特別な日だったが、充実した遊びがあることで幼児はそれを伝えたいことが分かったため、幼児が伝えたい気持ちが生まれるために、更なる充実した遊びが展開できるように環境を整えていく必要性、また心動かされる体験活動ができるよう環境を整えたり、場の工夫をするべ

きだと感じた。どの遊びが心を動かされる活動へとつながるか、幼児と共に遊びを楽しみながら作り出していきたいと思う。

遊びを可視化することで対話が広がりをもせた検証場面⑤

12月 23日 (金) 「可視化で広がる」

対象：クラス全体

<背景>

サークルタイムでの対話がなかなか難しい幼児の姿を受け、対話のツールになればという思いから、園の見取り図をグループに1枚と鉛筆を1本渡し、「今日はこの幼稚園地図を見ながら今日遊んだことを絵でかいてもいいし、字が書ける子は書いてもいいし、この地図を見ながらお話してみてね」と提案をした。



写真12 サークルタイムで
使用した見取り図

<エピソード>

見取り図を見ながら「ここ玄関で、ここがトイレだな」等と話をしながら、「〇〇は今日ブランコで遊んでいたよね」など友達がどこで何をして遊んでいたか知っている子もいた。「このタイヤは滑るんだよね」「ここで人生ゲームをして楽しかったな。〇〇と〇〇とやったよね」などと会話が弾んでいた。普段は「先生、こっちのグループに入って」などとの声が聞かれるが、この日は一切なかった。また「色塗りしてもいい？」など見取り図に色を塗る子もいた。あっという間に時間が過ぎ、「もっとやりたい」という声が多く聞かれた。



写真13
サークルタイムの様子

<考察>

園の見取り図というツールを使うことで、幼児の対話が弾んでいた。自分たちの園庭や遊具が見取り図というが視覚化することで遊びを振り返り、イメージしやすく、遊びを思い返すことで楽しかった記憶が蘇り、伝えたい気持ちへとつながったと考える。

伝えるための言葉の育ちを育てていく検証場面⑥

12月 20日 (火) 「楽しくなかった」

対象：抽出児K

<背景>

Kは進級児で年長児から一人で遊ぶことが多かった。進級してからも、自分のやりたい遊びをする中でその場を共有している幼児と一緒に会話ややり取りを楽しんでいる姿が見られた。



写真14 一人遊びをしているK

<エピソード1>

サークルタイムでKが「Kは泥んこ遊びと砂集めもしたけど、何も楽しくなかった」と言った。気になった私は「何が楽しくなかった？」と聞くと、少し困った顔をして「昨日見た夢は楽しかったんだけど」と言い、「Kはお友達いっぱい楽しいの！」と言った。それを聞いて隣にいた女兒が「え、友達だよ」と言うとKは一瞬驚いた表情をしたが、すぐに嬉しそうに友達をギュッと抱きしめた。

<考察>

Kが思う「お友達いっぱい楽しいの」という発言を省察すると、Kが楽しいと感じるときは友達と一緒に過ごすことであり、また友達に「え！(私たち)友達だよ」と言われたことを驚き喜んだことから、自分のことを友達だと思っている友達がいないと感じていたのではないかと考えた。Kは寂しさを普段の生活で自然と感じていたのかもしれない。私はKの「楽しくなかった」の言葉の裏にある思いを知りたいと思い、翌日Kの遊びの観察をすることにした。

<エピソード2> ～翌日のKの遊びの観察～

「おはようございます！」と元気に挨拶をして登園。しかし、すぐ特別支援担任であるM先生の元へ行き、一緒に過ごす。しばらくして、M先生が「先生、違う遊びをして遊んでくるね」とKの元を離れると今度は別の教師の元へ行き、ギューと抱きしめる動作で思いを伝える。そこから、その場にいた年中児2人とS先生と4人でお尻相撲や砂絵描きをして遊んでいた。その遊びも長くは続かず、またブランコをしている別の子2人のところへ行き、「仲間に入れて」と言って5分程一緒に過ごす。しかし、その遊びも長くは続かず、次は木の枝を使ってトナカイのクリスマス製作をしている子を発見し、「何をしているの?」「Kもやりたい」と遊びに加わった。製作や形で表現することが得意なKは自分なりに工夫(画用紙の表面に木の枝を貼るのではなく、画用紙に木の枝を折り込む)をしながら、トナカイの角を作って頭に付けた。私が「トナカイだね」と言って赤鼻のトナカイの歌を歌うとKも一緒に歌って喜んでいた。



写真15 教師に抱き着くK
動作で思いを伝える様子



写真16・17 製作を楽しむ様子

私は楽しそうなKの様子からきっと今日はKも楽しんでくれたに違いないと思った。その後、Kと二人になった場面で、私は「Kさん、この前のお話タイムで『何も楽しいことなかった』って言ったでしょう。それがずっと気になっていて…今日は楽しく遊べた?」と聞くと「今日も楽しくなかった」と言う。私は予想外のKの言葉に驚き、何が楽しくなかったか尋ねると「トナカイさん作ったからさ、もっと楽しいものすれば良かった」

「トナカイさんよりブランコすれば良かったな、ううん、終わったらブランコすれば良かったな」と言った。その言葉を聞いて、Kは製作自体は楽しかったけれど、遊び足りなかったことを伝えたいのではないかと思い、私が「もしかして、Kにはもっとやりたい遊びがいっぱいあったってことかな?遊び足りなかったってこと?」と聞くと「うん、そうそう」と笑って頷いた。

<考察>

サークルタイムの「楽しくなかった」というKの発言は言葉足らずなこともあり、「遊び足りなかった、もっと他の遊びもしたかった」という気持ちからの言葉だと考える。伝えたい思いはあるが、どの言葉を使ってそのように表現して良いか分からず、その思いを動作で表現してしたことに気付いた。私はその動作からKの思いを汲み取り、代弁したり等、Kに言葉での表現方法を伝えていくべきだったと反省した。気持ちを伝えるための言葉を増やしていける言葉の裏にあるその子の思いを汲み取り、“今の気持ちならこんなふうに伝えたら良かったのかな”等一緒に確認したり代弁することで、言葉での表現の仕方を伝えていく必要性を感じた。またこの検証でのKの“楽しくなかった”という発言からこれまでのKの遊びや行動を振り返り、Kの本来の思いを探るため行動観察をし、幼児理解に努めることができたことは良かったが、Kは楽しく遊んでいるだろうという私自身の勝手な思い込みや決めつけによりKの内面を考慮することがなかったことに反省した。今回はKの“楽しくなかった”という発言が言葉足らずだったという検証だったが、幼児の何気ないつぶやきでも、その言葉の裏にある本来の気持ちに気付ける教師でありたいと感じた。

4 検証のまとめ

(1) 学級全体の変容

本研究では本園の幼児の実態を捉え、幼児が興味・関心を持ち友達同士関わり合える協同的な遊びが充実できるよう、クラス全体で遊びを振り返る場を設定し、その延長として幼児同士で対話をするサークルタイムを設定し取り組んでいった。クラス全体の振り返りでは、個の遊びを紹介したり発表をする時間を作ることで幼児の“話したい・伝えたい”という意欲が見られるようになった。しかし、クラス全体の振り返りの場で話すことができて、サークルタイムでは「何を話したらいいの?」「楽しかったことない」等、話が進まず手遊びやゲームが始まったり教師が介入しないと対話が難しい場面も見られた。またクラス全体の遊びの振り返りの場では対話が交わされてもその後グループに分かれると一旦対話が中断してしまうことが課題となった。サークルタイムの設定の仕方や話す目的を持った場になるよう意図したねらいを持って環境を整えると共に、幼児が“話したい・伝えたい”と思えるような遊びの充実を図れるよう私自身の保育力の向上に努めたいと感じた。

(2) 抽出児の変容

抽出児I

- ・サークルタイムという個々の遊びを対話を通して共有する時間があつたことで、自分の気持ちを言語化でき対話をする必要性を幼児自身が感じる事ができた。サークルタイムが友達関係をつなぐきっかけになったと考える。

抽出児J

- ・チャレンジカードへの取り組みをきっかけに新たに挑戦しようという気持ちが芽生え、できるようになったことが自信となり、更に次の活動へと意欲的になる変化が見られた。
- ・嬉しかったことをきっかけに話したい、伝えたい意欲へと変化する様子が見られた。
- ・生き生きと活動し、表情からも自信が見られるようになり、自己肯定感の高まりが見られた。

抽出児K

- ・Kの伝えたい気持ちと語彙に差があり、本来の思いを伝えることができていることに私自身が気付かされる良いきっかけとなった。幼児の言葉の裏にある思いを汲み取り、一緒に言葉にして確認していき、言葉による表現の方法を伝えていく必要性を感じた。抽出児Kとのやりとり後は、全ての幼児が思いを言葉で表現できているかという視点に立って援助していると、言葉の受け止めの違いや、伝える表現方法を知らないが故に、誤解が生まれている場面が多くあることに気付いた。対話を通して遊びを深めていくために、自分の思いを言語化する力を育てるよう普段から言葉を引き出す声かけをする必要性を感じた。

以上のことから、「クラス全体で遊びを振り返る場の設定や、4～5名のグループに分かれて遊びの共有をするサークルタイムを設けることで、遊びを共有できる。また自分とは異なる視点の意見を聞くことで発見が広がり、次の活動の意欲となる。そのサイクルによって遊びが継続・発展し、協同した遊びが充実するだろう」という研究視点が検証できたと結論付ける。

これからの保育にあたり対話を通して遊びを深めていくために、クラス全体での振り返りの場では教師主導型の集まりの場ではなく、幼児同士が対話できる場となるよう工夫し継続して取り組んでいきたい。また、生活や遊びの中で相談や、話し合える場を意図的に作り、幼児同士で自然に対話ができるような環境作りに努めていきたい。

Ⅶ 総合所見と成果と課題

1 総合指導助言（琉球大学教育学部 講師 宮城利佳子氏）

- 検証場面①保育者が全体の前で発表する幼児を選ぶ際の意図が丁寧な幼児理解に基づいている。また、発表者だけでなく発表者への他の幼児の反応も丁寧に見取って援助を考えている。
- 検証場面② 他の幼児とのかかわりを通して、自分の気持ちを言語化するという経験ができている。他者と対話をする意義を幼児自身が感じられ、サークルタイムを継続的に行う意義が感じられる。
- 検証場面③ サークルタイムでの幼児の言葉を次の保育へとつなげることができている。
- 検証場面④ 幼児自身の発表したい思いの重要性がよく伝わる事例。
- 検証場面⑤ マップが幼児の対話ツールとしてうまく機能している。
- 検証場面⑥ サークルタイムでうまく気持ちを表現できていない幼児の援助方法を教師が丁寧に検討していった事例。

6つの事例から、

- サークルタイムの時間の充実だけでなく、サークルタイムを手段として幼児理解を深め、次の保育へとつなげる保育となっている。
- サークルタイムそのものを充実させる手段として、対話ツールを用意するという工夫がなされている。
- 幼児自身が話したくなることを大事にし、幼児同士の関係を大事にすることで、幼児の言語化への援助がなされている。

2 研究の成果

- (1) 遊びを振り返る場を日々設定することで幼児が友達の遊びに目を向けたり、個の遊びでの学びをクラス全体で共有することで更なる遊びの広がりや発展が見られた。
- (2) サークルタイムが幼児理解を深める手段として次の保育へとつなげることができた。
- (3) 幼児の遊びを観察し、何に夢中になっているかを読み取り、次の援助へとつなげることで遊びがより意欲的・主体的になり、協同した遊びとなった。

3 今後の課題と対応

- (1) 教師主導型の集まりの場を見直し、幼児同士で話し合い、相談し合える対話の場作りをしていく。
- (2) 幼児が対話をする必要性を普段の生活や遊びの中で感じられるよう、言葉を引き出すような声かけをして意識していきたい。
- (3) 幼児同士が関わり遊び込めるような環境の工夫を週案会議で検討していくことで、遊びはより深まる。教師が幼児の遊びを見取り育てたい姿を捉えた上で次の手立てを探していきたい。

〈主な参考文献〉

- ※幼稚園教育要領解説 文部科学省（2018）
- ※教育課程幼児教育部会（2016）
- ※「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」文部科学省(2005)
- ※「教師のさまざまな役割」秋田喜代美（2000）
- ※「保育のみらい」秋田喜代美（2011）
- ※「とことんあそんででっかく育て」柴田愛子（2019）
- ※「保育者の関わり方の理論と実践 教育と福祉の専門職として」高山静子（2019）
- ※「子どもが対話する『サークルタイム』のすすめ」大豆生田啓友・豪田トモ（2022）
- ※「10の姿プラス5・実践解説書」無藤隆（2018）
- ※「子どもの育ちをエピソードで描く」鯨岡峻（2013）
- ※保育 i s スペシャルインタビュー 汐見稔幸 (<https://hoiku-is.jp/interview/detail/4/>)（2019）
- ※ベネッセ教育総合研究所 河邊貴子 (https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/KORE_2019.)